

平成 28 年度  
第 2 回酒田市総合教育会議

議事録

平成 28 年度 第 2 回酒田市総合教育会議

1 日 時 平成 28 年 11 月 9 日 (水) 開会：15 時 00 分 閉会：17 時 00 分

2 場 所 酒田市役所 3 階 第 2 委員会室

3 出席者

(構成員) 酒田市長 丸山 至  
酒田市教育委員会  
教育長 村上 幸太郎  
委員 浅井 良  
委員 齋藤 義明  
委員 國眼 真理子  
委員 岩間 奏子

(事務局)	企画振興部長	中川 崇
	総務課長	菅原 司芝
	企画振興部都市デザイン課長	阿部 武
	市民部まちづくり推進課市民交流推進主幹	岸谷 英雄
	教育委員会企画管理課長	桐澤 聡
	教育委員会企画管理課学区改編推進主幹	長村 正弘
	教育委員会学校教育課長	今野 誠
	教育委員会社会教育文化課長	日下部 雅樹
	教育委員会社会教育文化課文化主幹	阿部 武志
	教育委員会スポーツ振興課長	小野 芳春
	教育委員会図書館長	阿部 博
	教育委員会企画管理課課長補佐	池田 裕子
	教育委員会企画管理課企画管理係長	関口 誠

4 傍聴者 2 名 (報道関係者 2 名)

5 協議事項

- (1) 本市の教育を取り巻く諸課題について
- (2) その他

6 議事経過の概要

次のとおり

## 1 開会

(企画管理課長)

それでは定刻になりましたので、これより平成28年度第2回酒田市総合教育会議を開会いたします。本日の会議の進行を務めさせていただきます企画管理課長の桐澤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。本日、報道関係者2名の方から傍聴の申し出がございましたので、ご報告申し上げたいと思います。最初に丸山市長からごあいさつをお願いいたします。

## 2 あいさつ

(丸山市長)

それでは、皆様お忙しい中ご出席いただきましてありがとうございます。今年度に入って2回目の総合教育会議でございます。ご案内のとおり第1回目は、「鳥海山・飛鳥ジオパーク構想について」と「酒田市の国際交流事業の現状」について協議させていただいたところでございます。おかげさまでもちまして、鳥海山・飛鳥ジオパークについては9月9日に日本ジオパークとして認定をいただいたところでございます。認定はいただきましたけれども、まだまだジオパークって何なんだろう、どういう効果があるんだという声が聞かれます。昨日も升田地域で、グループミーティングがありまして行ってきたのですけれども、そこは八幡地域ですから鳥海山のお膝元なのですが、皆さんの議論を聞いて感じたのは、ジオパーク認定がされたのだけれど、地元の升田に生きているものとして、どんな考え方をもって、どんなことができるんだろうということを皆で話し合いたいと議論されておりました。こういったことがジオパーク効果だろうと私は思っておりまして、その時に言ったのは、ジオパークは確かに学術的なテーマをベースにした日本の機関の認定なのですが、子どもたちの教育だとか、あるいは地域の一体感を醸成するいろいろな手立てだとか、あるいは地域住民の結束だとか防災への関わりだとか、そういったものを皆で考える、そのためのきっかけとして認定を受けたのですよという話をさせていただきましたけれども、まさにそのことをそのまま実践されていた升田地区の皆さんだと感心して昨日帰ってきたところでございます。そういった意味では、鳥海山のお膝元だからということだけでなく、酒田市全域に鳥海山と飛鳥というものにこだわった風土、まちづくりのための意識の醸成というものを図っていく必要があるのかなど、このように考えております。いずれにしても今年度日本ジオパーク認定を受けたということでスタートラインに立ちましたので、これから、皆様方との関係の中では教育という面でどのようにそれを活かしていくかということも議論して、実際の教育活動にしていく必要があるのだろうなと思っております。

そんなことを受けて、今日は第2回目ということで皆様にテーマとしてお出しをしておりますのが、駅前の市街地再開発事業です。大枠で取り組む業者が決まったわけですけれども、酒田市が公共施設として取り組む施設の中身を酒田コミュニケーションポートという仮称ではございますが、そういった機関を中に入れ込みたいという計画を示しております。そのあり方について鋭意内部でも議論をしておりますし、市民の皆さんからも意見を聞きながら、こういう機能を持った施設をつくりたいよねという話をさせていただいているところでございます。今日はその検討状況について皆様に情報提供をするということが一つ、また、その

上で、やはり教育機能を重視したいという思いがございいます。酒田という狭いエリアではなくて、駅の前にあるということもあって、秋田方面からも、鶴岡方面からも、新庄方面からもやってきているいろいろな自分のスキルを磨ける、あるいはそこからいろいろな発想を生み出すような議論の場のような形で活用できればなという思いがあるのですけれども、そういったことを皆さんと意見交換もさせていただきたいなということで考えております。

それからもう一つは「本市の中学生の英語を使った交流・体験について」でございいます。前回に引き続いて子どもたちの交流・体験をテーマとさせていただきました。特に英語を使った交流・体験ということに今回はテーマを絞り込んでおります。この総合教育会議の中で皆さんからいろいろご意見を伺うことで、教育委員会の中だけでなく酒田市全体として、学校の中だけでなく英語力を高める。あるいは英語というものに警戒感なく皆が素直に入っていけるようなそういった地域の土壌のようなものをどうやってつくり出せるのかということ、少し皆様からもご意見をいただければと思います。

皆さまご存知のとおり来年8月2日に外航クルーズ船が酒田に入ってくるという話題が届いているかと思います。来年来るお客さんというのは1,800名のうちほとんどは日本の方だと言われております。従って英語力がなければ皆さんをおもてなしできないというわけではないのですけれども、ただ一部には外国の方もいらっしゃいますし、万国共通語としてはやはり英語だということがございいます。来年8月2日に入港する船以外にも幾つか入港を検討しているところもありまして、そこには外国の方がかなり乗り込んでくる可能性があるということ踏まえ、酒田市というまちのあり方として、国際交流都市といいたまうか、そういった外国の皆さんをお迎えしても何の違和感もなくお迎えできるようなまちの環境づくりなどが大切かと思っております。

先々週でしたでしょうか、第一中学校に伺いまして、中学生の皆さんとグループミーティングをやらせていただきました。その中には教育委員会の事業「はばたき」でアメリカに行かれた生徒もおりまして、これから行くという生徒もございました。その方々との意見交換の中で出てきたのが、酒田に生まれて酒田に育って、いろいろな国の人と交流をしたいと、そういう機会に恵まれたまちであってほしいという意見が出されました。生徒会で役員をされている生徒が中心でしたので、やはりそれなりに意識の高い生徒だったのだろうなと思いますけれども、いずれにしても生徒、小学校の児童も含めてですけれども、これからの時代はやはり英語力は最低限備えるべきスキルというとらえ方で向かう必要があるのだろうと思います。そこについては学校という閉ざされた社会だけでなく、教育委員会の担当する社会教育も含めた全体で取り組む、そして市長部局も含めたまちづくり全体でそういう環境を育んでいく、そういったことが必要なのでないかと思っております。そういう意味で今回も特に中学生の英語を使った交流体験事業、いくつかありますけれども、そのあり方等について皆さんからご意見いただければと思っております。こういった皆さんとの忌憚のない意見交換を通じてですね、酒田市の一般行政と教育行政、これが目指すべき目標を共有しながら、一緒に歩んでいきたいと思っておりますのでございいます。

結びになりますけれども、本日ご出席いただいております齋藤委員が11月28日をもって教育委員の任期を満了ということで退任になります。齋藤委員におかれましては、平成20年の11月から8年間教育委員として教育行政にご尽力を賜りました。この場を借りてあらため

て御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。いろいろな意味で酒田市の教育行政にお力を貸していただきました。これからまたご自分のポジションに戻られても、いろいろご支援ご協力いただければありがたいと心より思っております。

さて、今年も11月ということで、まもなく来年度の予算ですとか事業をまとめる時期がやってまいります。今日だけではないのですけれども、この総合教育会議、この中で教育委員の皆さんから出された意見で来年にでもすぐに取り掛からなければならないというものについては、真剣に事業化、予算化について検討していきたいとそのように私自身思っておりますので、どうぞせっかくの機会でございますので限られた時間ではありますけれども、積極的にご発言、ご提言いただければありがたいと思っております。本日はお忙しい中ご出席いただき本当にありがとうございます。どうぞよろしく申し上げます。

(企画管理課長)

どうもありがとうございます。続きまして村上教育長からご挨拶をお願いします。

(村上教育長)

一言ご挨拶を申し上げたいと思います。丸山市長におかれましては本当にお忙しい中、今日の午前中酒田市の顕彰式が終わったばかりでございましたけれども、お忙しいところ総合教育会議を開催していただきましてありがとうございます。

先日松原学区の地域が主催している子どもたちや住民の意見発表会という非常に珍しい企画をしているところに招かれて、全員の意見発表を聞いたんですけれども、その中の一人、大人の方の意見だったんですが、自分は未来会議のメンバーに選ばれたということ意見を意見の中に取り込んで、あらためて酒田を考えるきっかけになった、そしてそれは地元松原を同時に考えるきっかけになったという意見を述べていて、積極的に地域のために参画していきたいということを述べられておりました。冒頭このようなお話をしますのは、市長が広く様々な人から意見を聞きながら、未来会議をはじめとして市政を進めていくという姿勢にたっておりまして、総合教育会議を会議があるからというだけでなく、積極的に意見を聞き、意見交換をしながら進めたいということが今日の話の中にも現れていると思っております。そういった意味で新しい教育委員会制度の中で市長部局、教育委員会が十分話し合い、意思疎通をする機会を十分に会していただいていることに、重ねて御礼を申し上げたいと思っております。

ただいまお話いただきました中に鳥海山・飛鳥ジオパークが、日本ジオパークの認定を受けたということで、本当に私どもも喜んでいるところでありますけれども、これは世界遺産が「登録」という言い方をしているのに対して、ジオパークはなぜ「認定」になっているかという話だったわけですが、これには自治体はその地域の特徴をよく理解し生活の中に活かし、持続可能な社会をつくっていくという意思があるということ認定しているという趣旨だということのようでした。だとすればやはりこういった活動を進めていくことが、認定し続けられるベースになるのかなと、そういう意味では認定は何年かごとに審査されるようですけれども、やはりジオの活動をあらためて進めていくことが肝要なのかなと考えているところでございます。教育委員会としましても、地道に、しかし着実に、進めてまいりた

いと思います。

今日は2つの話題でございましたけれども、内容につきましては市長からも説明がありました。私どももコミュニケーションポートに対する関心は非常に高く、先日、教育委員会といたしましては武蔵野プレイスを実際に見学に行ってきたところでございます。あわせまして、国立国会図書館の国際子ども図書館にも行って学んできたところでございます。そういった意味でも、今後コミュニケーションポートがよりよい施設になりますように私どもも何かできることがあればということで、意見を述べさせていただければと思っております。また、英語でコミュニケーションをとる子どもたちの育成については、国自体の小学校への英語の授業の導入という動きから見ても、やはり現代的な課題と思います。しかしやり方はそれぞれの自治体で工夫していいところがあると思っております。港町酒田ならではのやり方というのがあるのかもしれませんが。そういったような意味で酒田に根ざした英語の活用というようなことも考えてまいりたいなと思っておりますのでございます。今日はよろしくお願いたします。

(企画管理課長)

ありがとうございました。それではこれより、協議に入らせていただきたいと思います。ここからは市長に座長をお願いしたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。なお、発言の際には、皆様は座ったままで発言をされるようお願いをいたします。それでは市長よろしくお願いたします。

### 3 協議

(丸山市長)

それでは、酒田コミュニケーションポート（仮称）整備に向けた検討状況についてということで、日程の予備的な知識というのはすでにお持ちだと思います。市長部局からも企画振興部長のほか、都市デザイン課長も同席をさせていただいておりますので、いろいろわからないところがあればお尋ねいただければお答えできると思っておりますが、検討状況についてということで資料を準備させていただいております。整備検討委員会で意見されている主な視点ですとか、ワークショップ、やはりこのワークショップも多用しておりますのでそこで出た意見、それから市民アンケート調査、高校生のアンケート調査、市民団体等との意見交換と分けて整理してありますけれども、多彩な意見を載せております。

私はこれを見て、自分もそう思うし、皆さんの意見としてもなるほどという意見がおおむねここに出尽くしているかなという感じがしております。私はいろいろな制度、様々な事業を企画するうえで、市民が密接に関わり合うものについてはまずは市民の皆さんの意見を聞く機会をしっかりとってその意見を吸い上げたいというのが一つございます。しかし、市民の皆さんが言っている意見が全て正解か、あるいは今の時代の中でそれが的を得ているかということ、実は答えはないのです。なので、いろいろな人の意見を参考にする必要があると思っております。

そういう意味では教育委員の皆さんの自分の立場から見た意見というのもの、また違った意見もあるかもしれないし、専門の部門から言うと、別の視点がひょっとしたらあるかもしれ

ない。そういったことを含めていろいろな意見を聞かせていただいた上で、最終的にはどういう機能を持たせたどういう施設をどのくらいの規模で、しかもお金の制限というのは必ず我々の世界にはつきまといまいますから、そういったことも勘案しながら市民に喜ばれる、市民が気軽に使えるそういう施設を整備できたらと思っておりますけれども、先ほどもあいさつの中で言いましたが、私はやはり、ここはただ単に人が集まってワイワイ騒ぐ、あるいは楽しいものがありそうだから、イベントがあるからあそこに行って騒いでみようとかいう施設ではなくて、ここに中央図書館を、ライブラリーセンターという名前を変えて、そしてこのコミュニケーションポートの中心機能として据えたというのは、やはりそこは教育が、教育というものがこの施設の核としてなければいけないのかなと思っていたので、その点については、揺らいでないのです。ですから、ただ教育とか学習とかそういったもののあり方も時代とともに、非常に動いているように思います。学校のように決まったカリキュラムで、通常図書館として考えるのは静かな場所でじっくり本を読むといったそういう機能だけにこだわった施設ではないものにしたい、そういう意味では、例えば資料の4市民アンケート調査の結果の中の(5)、閉館時間の延長を望む回答が多いとありますけれども、午後9時の閉館という意見が出ています。まさにそういう時代なのだろうなと思います。

今の図書館は閉館が午後7時です。学生であればそれでもいいのですけれど、大人の皆さんが集まって議論したり、あるいはここにはホテルも併設されますから、貴重な本があるなんて場合はじっくり、ひよっとしたら夜中まで研究をしたいという人もいるかもしれません。ひよっとしたら部屋に借りて行って読みたいという人もいるかもしれないのです。そういった様々なニーズに応えられるようなライブラリーセンターにしたいということが一つございます。

それからもう一つ、観光情報のセンターとか、そういったカフェだとかが資料の3にあります。駅の前にあるということ、それから鳥海山・飛鳥ジオパーク、そこがスタート地点だという意味合いも必要かなと思いますし、いろいろな機能がコミュニケーションポートには求められているのかなと思っております。そういった意味では、基本的にはここにあげていた項目については十分参考にさせていただいて、これからの施設のあり方について協議をしてまいりますけれども、12月中くらいに全体の施設の整備プランを実際具体的なものにします。市と、それから地元地権者で協定を一回結ばせていただいて、来年1月になりますと、まず基本設計というものに取り掛かっていって、実施設計、そして建築、完成、共用開始ということで、平成32年度の末、平成33年3月には完成させたいと、このように考えております。先ほども言いましたけれども、駅の前にあるということで、駅という拠点、人の移動する拠点の目の前にあるということから、少し離れた地域からも気兼ねなくやってきて利用できる。そういう魅力のある施設にしたいと思っておりますけれども、先ほども言いました教育にこだわった施設にしたいという思いがありますので、ぜひ皆さんからもご意見をいただければと思っております。その前に何か聞きたいことがあればご質問も最初にあっていいかなと思いますので、遠慮なくご発言ください。

次のテーマにも関わってくるのですが、とりわけ英語力を子どもたち、それから中学生、高校生、大学生、社会人に普及する、親しんでもらうための機能というのもあっていいのではないかという思いもありまして、そういった点は、この資料には載ってなかったかと思

ますが、特に英語に特化したものというのはないのですがどうでしょう、武蔵野プレイスに行かれたということでございました。あの施設をコーディネートされた方も実はこちらのほうにも絡んでいます。株式会社図書館総合研究所で図書館のあり方について専門でいろいろコンサルティングしている方ですね。私もその方と会っているのですが、本のパサージュ、本が積んであって天井まで本になっております。あれは建設会社さんが描いた絵としては、それでいいのですが、図書館というものを管理する、運営する方からすると、手の届かないところに本があっても出し入れするのも大変ですし、わざわざハシゴをかけて上って行って本の管理をするなんて非効率なものは図書館としては好ましくないという意見もありました。このようにいろいろな意見があると思います。ここに描いたのはあくまでもイメージなので、必ずあのようなになるということではないと思いますし、今、図書館機能として効率的な本の管理とか、貸出とかそういう業務をするにはこういったあり方のほうがいいということを一生涯議論しておりますので、あの絵にこだわる必要はないかなと思っております。皆様いかがでしょうか。

(國眼委員)

教育長をはじめとして我々5人、武蔵野プレイスを見学してきたわけですが、今、市長が教育機能の充実拠点として整備したいというお話をされました。武蔵野市でも中高生をいかに本に親しませるかということが課題だということを仰ってしまっていて、今日の資料にある高校生アンケートにも、図書館に行かない理由や、自由意見のところを書いてあるように高校生や中学生にとっては、従来型の図書館というのは足を向けにくい施設として認知されているだろうと思います。図書館の機能を充実させるということも大事なのですが、小学生の頃には、朝読書だとか家庭教育の中での家読の勧めがあって、だいぶ読む本の冊数が増えているようですが、中学生になるとガクンと落ちる。やはり中高生を本に親しむ、本って面白いということを感じさせるしかけが必要だと思います。

ライブラリーセンターに行く人と人の出会いや本との出会いがあるよという場にしていくためには、従来型の静かなスペースではないある意味で本を媒介してお喋りをしてほしいというような中高生に向けた施設というのをぜひ武蔵野プレイスと同様に設けてほしいという思いがあります。したがって、同一の平面上に図書館機能を全部置いてしまいますと、静かに本を読みたい人たちにとっては不満になるでしょうし、中高生にとっては静謐さを要求される堅苦しい嫌な場所になってしまいますので、何とか一工夫して場所を分けて、中高生だけでなく酒田市内で働く若者たちにも集いやすいある程度の自由さを許容された空間をつくってほしいと思います。

(丸山市長)

今の意見についてはまったく仰るとおりだと思います。整備検討委員会の中でも人々が集う、集いやすい、交流する場所であってほしいということ、そして幼児から高齢者までという意見が出ておりますが、まったくそのとおりだと思います。あとはつくり方でお互い邪魔にならないというか、機能をきちんと保てるようなつくり方というのは必要なだろうなと思います。



(國眼委員)

やはり今までのつくり方ですと、おそらく高齢者はたくさん集うと思います。それから比較的小さな子どもを連れてお母さん達もいいところがあれば利用すると思うのですが、中抜けというんでしょうか、中学校、高校、大学、社会人それから仕事で忙しい30代、そういった方々が抜けてしまうようになってしまわないでしょうか。武蔵野プレイスで、年代別の利用率をお尋ねしたのですけれど、ほぼどの世代も万遍なく利用されているとのことでした。そういった仕掛けづくりというのが必要だと思います。

(丸山市長)

私がちょっと気にしているのは、武蔵野市、三鷹市などいろいろな所が密集してますよね。武蔵野市に別件で行ってきたのですけれど、子育て支援の施設などは、武蔵野市の職員が中において運営しているのですけれど、使っている武蔵野市民の比率は20~30%だそうです。武蔵野プレイスもそうだと思うのです。ああいったところは、知的好奇心の多い方がいっぱい住んでらっしゃるので、酒田はどうかと思ったときに正直申し上げて、どうなのでしょう。私の偏ったものとの見え方なのかもしれないのですけれど、そんな人ってたくさんいるのだろうか、限られた人しかいないのではないかなという不安もあって、まさにつくり方ですけれど、あまり関心のない方であっても行ってみたいと思わせるような仕掛けというのが必要で、図なんかあるといいのですけれど、入り口の前にイベント空間というのがあるので、立ち寄ってもらえる様々な仕掛け、イベントもやっていかなければいけないのだろうなと思っております。そうすると施設自体を運営する組織はどういう組織がいいだろうと、今日は中央図書館の図書館長が来てますけれど、図書館の職員があそこにおいて、そういうことまで全部仕掛けをするというのは、ちょっと荷が重いのかなという思いがあって、そういう仕掛けをするための組織、体制というのと同時につくっていかねばいけないというのがこの事業の難しいところと思っております。武蔵野プレイスは駅前ですし、いろいろなものが集積しているし、そもそも裕福な方々がいっぱい住んでいて大学も多いし通勤通学も活発だということからすると、それなりに機能するだろうなというのは大体想像はついたのですけれども、酒田の場合はどうかと正直不安な面もあるのです。

(國眼委員)

ですから、先ほど市長がお話しされたように酒田市だけでなく、庄内の教育資源として機能するよう、遊佐町もあり、鶴岡市も、庄内町も三川町も含めて、いろいろな市民が活用できるような施設だといいいのではないかと思います。武蔵野プレイスの場合も半数以上が他の市の方だと聞いています。つくるのは酒田市、運営するのも酒田市かもしれませぬけれど、将来的には、庄内地域や隣接地域の市民の交流の場や自学自習の場をつくるというねらいで考えていただきたいと思います。

(丸山市長)

ありがとうございました。さて、次はどうでしょうか。

(浅井委員)

武蔵野プレイスのほかに、7月に都市デザイン課の方々と多賀城市と紫波町も拝見させていただきました。県内には米沢や東根にも新しくできましたが、そのような施設を見ると、時代を先取りしたような図書館ができています。おしゃれで、カフェがあって、レストランがあって、飲み物を持ち込んで本を読んでもいいとか、夜はお酒を出すようなレストランなどもあったりして、行ってみたいという欲求が高まる施設だなということを感じるわけです。非常に集客力があるのだろうと思うのですが、ただ、そのような目新しさがいつまで続くのかということを見ると、心もとない部分もあります。数年は続くのですが、10年先、20年先を考えた場合にはたしてそういったものだけで通用するのか。やはり図書館というのは酒田市民にとって大事なものですので、20年も30年も40年も続いて機能してほしい、そういった施設であってほしいと考えたとき、やはり大事なのは中身だと私は思います。図書館の機能をどのくらい高めていけるかということで、この資料にもブラッシュアップという言葉が書いてありますが、新しい図書館をいかにブラッシュアップできるかどうかがとても大事になってくると思います。

今の図書館は、利用者の数や貸出冊数の多さといったところが狙いのようになっているのですけれども、最近ではだんだん考え方が変わってきて、もともと持っているような図書館の機能といたしましうか、例えばレファレンスコーナーを充実させて課題解決型の図書館にしていくとか、そういったことがすごく求められているのです。そのようなことを考えたときに、確かに酒田市でも年間1万件くらいのレファレンス相談があるということで非常に多いと感じるのですけれども、もともと市民の課題解決に向けていろいろな情報等を提供しているような図書館、例えば市民がビジネスとか農業でいろいろな課題があるわけです。そういったことに対しても、図書館がある程度方向性を示してやることのできるようなそのような図書館ができないかなということが一つあります。

それからもう一つは、いろいろな市民の生涯学習に対する情報提供を図書館自体が積極的にやっていくことができないかということです。例えば、武蔵野市でも紫波町でもやっていることですが、図書館が中心になって他の部局、生涯学習部門や、青少年活動部門などと結びついて、いろいろな活動や展示、講座などをつくっているのです。そういった多様な活動をつくっていけるような、そして市民に情報提供できるような施設としても考えていくことができないかと思っています。そのためには、いろいろな他の部局と交流しながら企画したりすることができるような職員、多様な市民の課題に対して答えていけるような職員を配置していくことが、必要なのではないかと思います。もちろん、行ってみたいというような建物も大切なのですけれども、中身をもって、市民がたくさん集うようなそういったことを目指していくことも大事なのかなと思います。図書館の機能を充実させるといったような方向でもって行ってほしいと思います。

(丸山市長)

私も大賛成ですね。建物なんていうのはどうとでもつくれるのです。ちょっと知恵を絞ればできるのですけれども、今行ったようなレファレンスも含めて、とにかくいろいろな分野があるわけで、農業から製造業から観光からですね、生涯学習といったことも、360度何でも

生涯学習になる時代ですから、そういった意味では多様化した関心の対象に対してヒントを与えるような本がどういう本なのかということも含めてきちんと指導、助言できるような人もそこにいてほしいし、相談をする側に対して良い印象で接することができる、そういう意味で非常にこなれたコンシェルジュ的な側面を持ち合わせた高い水準の職員がぜひそこにももらいたいという思いがあるのですけれど、そういった職員をそこに抱えるとなるとハードルが高いという思いもまたあって、ただ、施設はつくるわけですから、例えば、それを全部市の職員が担うという前提で考える必要はないわけで、民間の皆さん、あるいは大学や、そういったところから協力をいただきながらそういう組織をつくって、そして、人も抱えて、そういうサービスをするということはあってもいいんじゃないかなと思います。特に酒田の図書館には貴重な本がかなりあると思うのですけれど、そういったものがあるという情報も含めて、場合によってはホテルに泊まっている人が一晩かけて何か貴重な酒田に関する本を読みたいとなれば、こういう本がありますよということできちんとフロントまで届けてくれるようなそういうサービスも全部あって、トータルとして機能するような施設であれば非常に魅力がある施設になると思っておりますけれども、そういったソフト面が、この施設の核になる重要な部分と思っております、あまりハードにばかりこだわる必要もないと思っておりますので、ぜひ事務局にはそういったことについて実施設計を組む際に、まとめていただければありがたいと思っております。

(浅井委員)

そういったスタッフについては、事前に研修させておいて、スタートの時点ですぐ活動ができるようにしてもらいたいと思います。

(丸山市長)

どういうやり方があるのか少し考えていきたいと思っております。ここ1、2年の勝負かなと思っております。

(齋藤委員)

図書館については、今浅井委員が言われるような図書館サイドでの体系づくりというのに同感でして、それを活かすというような意見を言わせていただければと思います。ある程度そういった図書館の体制ができれば、例えば、駅周辺のコミュニティ振興会関係で、いろいろなサークルの方々が、日々コミュニティセンターを使っていただきながら活動を行っているわけです。その方々と、コミュニケーションポートとの連携の取り組みを考えていく中で、各活動を行っている団体の方々が、活動の中で何か疑問に思うということ、この図書館で調べていただきながら、コミュニケーションポートに関わりをもっていただくことによって、その方々をつなぐことができるのではないかなと思います。また、文化センターでもいろいろな方々が活動をされています。文化センターとこの図書館とのネットワークづくり、例えば各コミセンに、これもお金がかかる話で申し訳ないのですけれども、各コミセンに端末を置いて、そして活動していて調べたいことを端末でもって、ライブラリーセンターとのネットワークの中で、検索しながら、ここにあるよというものを提供するだけで、ある程度コミ

ユニケーションポートにも来ていただけるのかなと思います。そして、こういったことが皆さんに馴染んでくれば、ここに書いてあるような観光情報センターという位置づけも、ライブラリーセンターを核にしての発信が可能かなという感じがするのです。例えば、文化センターと駅前が、歩いて15～20分くらいでしょうか。文化センターと近隣地域のコミュニティ振興会との、インフラ的なものもどう考えていくかという課題もあろうかとも思いますけれども、そういった部分を根付かせることができれば、駅前にも賑わいが戻ってくるのかなと思います。

先ほど國眼委員が武蔵野プレイスの話をしていただきましたけれど、この酒田の中ではそういった取り組みも非常に大事だし、青少年の居場所づくり、高齢者の居場所づくり、団塊の世代といわれるような方々の居場所づくりというものも、セットにして考えないとなかなか賑わいはでないのではないかなと思います。そういった機能の充実についても地道に整備できれば、世代は変わりながらも駅前のコミュニケーションポートに関心を持っていただける方が増えていくような感じがします。こういったことについても検討の余地に入れていただければありがたいと思います。

(丸山市長)

地元の皆さんとの意見交換も実施しておりまして、浜田地区や、琢成地区の方たちはそういう施設が一つできるということへの期待が非常に高いのだと思いますし、その運営の一つに地元の皆さんからいろいろと絡んでいただければ、非常にありがたいという思いがあるのですが、そういった意味ではとにかく酒田はマンパワー的には武蔵野や三鷹などあいいった所に比べれば圧倒的にないわけですし、しかも高齢者が多いという中で1人でも多くの地域の皆さんから支援をしてもらう、それは、極端な話お正月に皆さんからあそこで獅子舞のイベントをやってもらってもいいわけですし、そういった小さなことでもいろいろなことで協力してもらってこの施設の発信に手助けしていただければありがたいなと思います。文化センターとの連携になると、これはどうなんでしょうか。文化センター、中央公民館が残るわけですね、図書館機能はなくなるわけですが。何か具体的な構想については、どうなっていましたでしょうか。私はそこまで具体的なところはまだ頭には浮かべてないのですが。

(都市デザイン課長)

武蔵野プレイスは、中に市民活動をするスペースが設けられておりまして、そこが図書館とうまく融合しているような感じがありました。そういった市民活動ができるようなスペースというのもライブラリーセンターの中では設けることができるのかなと思っているところです。

(丸山市長)

文化センターががらんどろになるなどということはないでしょうか。

(都市デザイン課長)

上手く住み分けして対応していかなければと思っています。

(丸山市長)

本当にわずかな距離ですから、双方の機能が相乗効果で飛躍できるような、そういった使い方が必要かもしれないですね。

(岩間委員)

私も皆さんお話しされていたとおりのことを感じておりました。特に高校生アンケートの調査の結果と傾向を見ると武蔵野プレイスのような場所があれば、酒田の学生たちも駅の電車を待つ間でなくても気軽に立ち寄ってくれるのではと思いました。目的無く気軽に立ち寄れる場所としてそういう場所があってもいいのですけれども、やはり続いていくためには無目的ではなく、何か理由があってそこに集うほうが良いと思います。であれば、やはり集う目的、どこを着地点とするのか難しいかとは思いますが、この図書館の機能の中で高校生、自分の意思を持ってそこに行くという高校生は対象としてあるのですけれども、その下の中学生などが、自分の学校の図書館の中では物足りないものを酒田市のコミュニケーションポートに行けばよりたくさんの蔵書があったり詳しいものがあったりというような、きちんとした目的があって学習に利用していける、集えるような場所であることも必要だと思いますし、自分で買えないような専門的なものでも調べればどんどん深掘りしていけるような資料があるというものを目的になると思います。訪れた先にいるちょっと上の先輩の高校生の姿があったり、高校生もそこに大人の背中を見て憧れたりというような、ちょっと上の先輩の背中を追えるようにいろいろな人と交流ができるような場所であってほしいと思います。

先ほど齋藤委員のお話にありましたけれど、メールボックスといいますか、市民活動をしている人たちのお便りのようなもの、イベント発信や部分的な情報開示として自分たちがそこに資料を置くだけというものでなく、いろいろな人が、そこに関係のない人も自由に見れて、こんな活動をしているということが、自分から発信しなくても見てもらえるような場所というの、いいアイデアではないかと思いました。文化センターの中でいろいろな教室をしたり、いろいろサークルをつくったりしている方々の発信の場として上手く住み分けをしながら、自分が新しい世界に踏み出すために、自分から探さなくても触れていくことで少し関心なり湧くのかなと思いました。それがどんな世代でもいろいろなところにアンテナがあるような、そういったものにたくさん触れることができるような場所になってほしいと思います。

(丸山市長)

今のお話も齋藤委員と先ほどの浅井委員のお話に繋がっていくのですが、やはりそういったことを仕掛けていく仕掛け人の集団というのがそこにいてもらいたいと思います。これをどうやってつくるかというのが大きな課題になってくると思います。

一昨日、私も武蔵野に行って「0123」という施設を武蔵野市長が案内してくれたのですが、まさにそういったことがありました。そこを使うのはお母さん方なのですが、どういふことに悩んでいるのかを貼るんですね。そこに自分はこういう意見があるんだという人がまたやって来て自分で回答を貼る。そこで少しコミュニケーションが生まれたりするんですけど、その経過もオープンにされていて、それを見たお母さん方が、こんなこともやってい

るんだ、私もこういうことに悩んでるいんだけどということでもた貼る。そのように輪が広がっていくのでした。それから0歳児、1歳児、2歳児、3歳児、0歳児はそうないでしょうけれど1歳児、2歳児が遊ぶ遊具については、そこにいる人たちが手づくりでつくるのでした。そんな高度な遊びを求めないのでしょね。1歳児、2歳児などは、こういう紙に何か重ねてなど、そんな程度のものでいいのですが、それが全て自分たちの手づくりでした。これは凄いと思って、感心してみたのですが、そういったアイデアをどんどん出したり自分たちで物をつくったり、そういうメールも含めてですけれども、そういったやり取りの仕掛けをするスタッフというのがそこにきちんといないとなかなかできないのではないかと思います。そういう人たちをどうやって集めて、どうやって育てて、役所的な感覚ではなくて市民目線で活動を展開してもらえるかどうかです。どうやって組織したらいいのかは課題だと思いますし、何より子どもたちが絡むとなるとそこと学校教育が、きちんと連携が取れてないと、学校は学校と言われても、これもまたちょっと困るし、学校の先生方も信頼を持ってあそこに行ってこういうことを勉強できるんじゃないのと子どもたちに伝えてもらう必要もあるし、親御さんにも伝えてもらう必要があるし、そういった体制をどうやって組めるか、これができたらこの施設は半分成功したようなものと思っているのですが、そこはこれから我々も議論させていただきたいと思っております。まだまだこういう形でやるとは決まっておられませんので、これから検討をさらに深めていくという段階ですから、皆さんの意見をしっかり受け止めた上でと思っております。もし他に言い忘れたということがあればご意見をお願いいたします。

(浅井委員)

指定管理か直営かという問題なのではございますけれども、紫波町は直営で、多賀城市は指定管理でした。武蔵野プレイスはどうかというと指定管理でした。中身を見ますと指定管理は指定管理でも、公益財団法人が指定管理をしておりました。市がバックアップしている公益財団法人でして、その公益財団法人の理事長は、武蔵野プレイスに長く関わっている方で、元市の職員です。また、現図書館長は市から派遣されている職員のため、市の考え方が十分にプレイスの運営に反映されているので、指定管理でも問題ないといった理事長のお話でした。指定管理だから一概に問題があるということでもなく、市や教育委員会の考え方が十分に図書館に伝わって運営されていれば、指定管理であろうが直営であろうが問題ないのではということも思っています。酒田市がこれからどうなるのかわかりませんが、そのようなこともいいのかなと思えました。

(丸山市長)

仰るとおりです。私は市役所というのは市民にとって最大のサービス産業だと思っております。出雲市長を経験された岩國哲人さんがそういったことを言っていたという話ですが、直営でも指定管理でも、意識があって、技を持っている人がいれば直営や指定管理にこだわらずそういう技能を發揮できるのだろと思っておりますけれども、現状として受け手の市民が本当に素晴らしいサービスだと思ってもらえるようなサービスを今の市の職員が直営でやれるかということ、私も市の職員出身ですが、自信を持って言えるような状況ではないと

私は思っています、やはり役人なんですよ。ですので、やはり私はそういったことについては他の組織からきちんと担ってもら。特に民間の良い面を備えた集団からやってもらえるのが良いのではという思いであります。ただそれは指定管理という形でそういうことをするのか。あるいは指定管理ではない管理の仕方、直営でも指定管理でもないとなると他にもありますか。

(企画振興部長)

部分的に管理委託というようなことはあるかと思います。

(丸山市長)

あえて言えば、例えば市とどこかとお金を出し合って第三セクター的なものをつくるとか、あるいは公益財団法人でもいいでしょうし、そういう別個の組織に運営を担わせるということはあるかと思います。ただし、そこに役人が天下りで行くけれど直営ではないという形を整えてもそれはちょっと違うだろうと思うので、本当の意味で市民にとって素晴らしい運営をして、良いなという評価をいただくためには、そういった体質の組織ではなくてやはり外からしっかりノウハウを持った、能力のある人をお招きしてやるというやり方のほうが私はいいかと思います。やはり、行政がそこにコストをかけたくないとか、安かろう悪かろうでいだろうと思うと、これはやはり失敗すると思っていますので、少しかけるものはかけてでも市民に喜ばれる、利用者に喜ばれる施設にするため、どういう組織体制を組んでいくかというのは、本当に難題だなと私は思っております。

(浅井委員)

わかりました。

(丸山市長)

今日はせっかく企画振興部長や、都市デザイン課長、図書館長、学校教育課長が出席しておりますので、学校教育との関わりについても触れられればと思います。私は学校教育の中でもこの施設を授業として活用できる、そういった機能があってもいいと思いますし、あるいはここで学校の授業をしたり、運営組織に外国の方がいるとすれば、そういった人たちから英語を学ぶ機会があったりなど、そういったことがあってもいいし、あるいはこの組織の外国の方が学校に出向いて小学生、中学生の英語の授業をするというのもいいと思います。次のテーマに関わってきますけれど、そういった機能を持っている組織がコミュニケーションポートの運営にあたっていいなと思っているので、あまり物事を狭く考える必要はないとは思っております。どうでしょうか、企画振興部長に振るようで申し訳ありませんけれど、現在第一線で構想や計画づくりをまとめているわけですので、意見や感想などがあれば発言いただきたいと思っております。

(企画振興部長)

非常に貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。まさしく市民の意見を聞き

ながら、今はハードだけでなく、ソフトにつきましても基本計画、基本設計ではなくて基本計画というものを今年度中にまとめていきたいと考えておりました、運営にあたっては、市民の方が参加、考案できて、市民の方が実際動いていただけるようなそういった組織、それは運営主体と一体となるかどうかというのはまた別なのですけれども、お互い連携をしながらコミュニケーションポートを運営できるような、そういった体制にしていきたいというように考えております。またアンケートをご覧になっていただくとわかるのですけれども、まずは気軽に寄れるような場所をつくってもらいたいというようなことが第一に意見として出てきております。一方で教育機能をいかにここで充実させていくのかということも大事ですので、来やすいという環境づくりをきっかけとしていかにそこで来た人に知的好奇心が湧き上がるようなそういったソフト面も含めたものを提供できるかということにつきましても、引き続き検討していきたいと思っております。ご意見をいただければありがたいと思います。

(丸山市長)

次のテーマに移る前に村上教育長から整理もかねて少し意見をいただければと思います。

(村上教育長)

委員の皆さんの関心が非常に高いこと、私自身もどんなものができるのか楽しみです、市民も非常に関心が高いと思います。一つのチャンスとして完成したときに「これが完成形です」と言わない方がいいのではと思っております。これは何かがまだ十分ではない状態、そこを埋めるのは市民だという、コミュニケーションポートは私たちがつくらなければならないという意識なのだと思います。企画振興部長が話されたとおり、視察で私が一番興味深かったことは、最初はこんなフロアとつくった人は考えたのだけれども、来ている人たちがこういうフロアにしたらいんだよねということで落ちついていくということだったのです。最初からこのフロアはこうですと看板を書いて掲示物を書いて、ここはこういうフロアですからとは言わなかった。それは利用者の人たちが自ら判断して自ら気をつかい、来やすくするようにしてつくっていった。それを図書館側が、プレイス側がよく耳をすませていたということだったんです。そして市民がそこをつくっていく、プレイスとしてのいい場所をつくっていくという感覚があったのでできたということは非常に聞いていてなるほどと思った一つです。

そしてもう一つ、図書館機能だけではなく、情報化の時代の中で地方自治体の図書館にはそこにしかないものというのは絶対守っていくべきだということがあって、ここに来なければというものは前面に出してもいいんじゃないかと思います。それは単に酒田の歴史だけではなくて、例えば松森胤保の図1枚にしても大変な価値があります。大英博物館から目をつけられても不思議ではないと言う人すらいるわけですから、そういうものというのは、ふらっと来たときにもものすごく大きな図でも掲げられていて、どうしたのこの人というような感じでだんだん入っていくようなことがあってもいいと思います。本物はもちろんすぐには触れませんが、酒田を訪れた人が最初に目にする、酒田の宝物に触れられるというそういう場所、それは同時に酒田のアピールにもなるのですが、酒田の宝なのだというそこがプライドだし、まちを、市民を集約していく、結束していく、そういうものだと思いますし、外



にも出せるポートになるというそういった機能ということについては、最初から目論んでおいた方がいいのではないかと思います。そういったことを解説できる人の人材育成だとか、人にお金をかけるということは、誰かに頼むにしても育てるにしても本当に欠かせないことではないかとあらためて思いました。

(丸山市長)

ありがとうございました。大変素晴らしい意見だったと思います。松森胤保の話で参考までに聞くのですが、光丘文庫の資産を中町庁舎に移転させる件なのですが、それは貴重な資産が傷むのを防ぐためにまず古いものから引越しをさせておりますけれども、ああいったものはここにあった方が良くないと思いますか。それとも別個に保管した方が良いでしょう。スペースや管理の関係でなかなか現状では困難なのです。そのため、別に管理をするしかないのかなという思いもあるのですが、酒田の宝というものがそこにあって、そこで触れられる、あるいはアピールできる施設としてこのコミュニケーションポートを機能させようとするならば、コミュニケーションポートにあった方が使いやすいわけですが、別に収蔵施設なり閲覧施設をつくるという選択肢もある。あるいは公益大の図書館に貴重な研究資料という位置づけをして動かすというのがあります。また、現在の光丘文庫に立派な収蔵庫をつかって文字どおり建物と機関としての光丘文庫というものを再整備するというやり方もあるのですが、なかなか市の財政を考えるとやはりハードルが高いという気持ちもあるのです。もし皆さんからご意見がございましたら参考までに聞かせていただくと、今こうしますよという結論は出せませんが、せっきくの機会ですのでご意見を聞かせていただければと思いますけれども、いかがでしょうか。光丘文庫以外でも例えば阿部記念館など、いろいろ貴重なものがあるのだと思うのです。

(村上教育長)

機能さえ持たせればあとは本当に調べたい人からは、そちらに行ってもらって、そこから発展していくような仕組みになっていけば良いかと思います。ただ窓口があってそこまで行かなければ見れないのではなくて、酒田に来た人が、プレゼンされた状態、年中ではないですが、入れ替えて時には阿部次郎、時には松森胤保、はっと気づくようなそういう仕掛けがあれば良いのではと思います。やはり蔵書全部を持っていくのはかなり難しいことだと思います。

(丸山市長)

光丘文庫の蔵書が全部取まれば良いなという思いはありました。ナポレオン蔵書などいろいろ貴重な蔵書がありますよね。光丘文庫そのものは文化財として建物は残していく、保全はするけれども、そこに図書館の機能や資料の収蔵機能まで求めるのはちょっと難しいかなと思っておりましたので、せっきくつくるのであればという思いもあつたのですが、今の計画では図書館の収蔵能力からしてもなかなか厳しいという話もありますのでどうしたものかと悩んでいるところです。そういった悩みも抱えながら走っているという状況なので今この場で何かご意見がありましたら最後でもけっこうでございますので、お聞かせいただければと

思います。

それでは、コミュニケーションポートの検討状況については貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。引き続き、2番目の「本市の中学生の英語を使った交流・体験について」でございます。こちらについても、資料がここにありますけれど、これは、青少年の国内外の交流事業、中学生の海外派遣事業「はばたき」、ロサンゼルス四世とのバスケット交流事業などを説明したものと、外国人英語講師の招致事業、今は3名の外国人講師より学校教育の中で英語に親しむための様々な仕掛けをさせていただいているということの説明資料になっております。

先ほどのあいさつでもお話ししましたが、一中の生徒とお話しをしたときに、彼らの興味の対象が国内にとどまらず全世界に向いている。これはネット社会というのもあるのでしょうけれども、外に向いているわけですね。向学心の強い子というのは、ありとあらゆる場面で外国の方と触れあえる機会というものを熱望していると私は感じていました。

私も市長になりましたから、交流都市というからには国内外、いろいろなところとの交流の仕掛けをつくらうということで、とにかく何か芽が出そうだったらすぐに食いついて、姉妹都市どうですかと話などもさせていただく中で、まずはオハイオ州デラウェア市、アメリカの市と姉妹都市の締結をしたいと思っております。デラウェア市では昨年教育長が調印してきたという認識でありますから、姉妹都市だと思っているのかもしれませんが、市としては正式にデラウェアの市長と調印をしたとは認識していないので、ぜひ来年はそういった正式な場を設けて、酒田市民にも姉妹都市の締結をして交流するのだというアピールをしていきたいと思っております。

もう一つは今まさに申請中ですが、東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン登録申請です。東北公益文科大学にニュージーランド研究所という組織がありまして、ニュージーランドの研究については、日本国内の大学の中では最も進んでいる、資料もいっぱい持っている、ニュージーランド文庫というものも持っているのですよね。その所長の方が今の矢口副市長ですが、そういった交流の歴史がある中でこのホストタウンにニュージーランドという国を選んで、現在、国に登録申請させていただいております。ニュージーランドは勿論英語圏の国でございますし、国土は小さいのですが独自の価値観を持った国民性だと伺っておりますので、そういったところとの交流をとおして、とりわけ子どもたちが何かしらの刺激を受けるのではないかなと、そういう思いがあってこの2つについては、交流をぜひとも来年度以降活発にしていきたいと思っております。なんといっても目先の効果としてはやはり英語力を実は念頭においているわけですし、小学生、中学生、高校生そして企業で働く若い方々に対しても、やはり英語というものを身近な存在として受け止めてもらえるようなそういった風土のまちにしたいと思っております。そのためにどういう仕掛けを今後やったらいいのか、そこは皆様からまた少しご助言やアドバイスなどもいただければと思っております。

現在、小学生、未就学児に対して「英語で遊ぼう」という事業を実施しておりますが、30年度でしたでしょうか、小学生での英語の必修化、30年度からそういった状況になる中で、国の制度にも先んじていろいろな仕掛けをしていきたいという思いがあります。そういった

意味では、外国人の英語講師は今3人しかいないのですが、もっと教育委員会としては増やしたいという意向もあるようで、そこは思いとしては私もまったく同じということで、どうやって来年の予算に、ここで教育長と取引するわけではないのですけれど、思いはまったく同じであります。せっかく英語圏のデラウェア市と姉妹都市を締結いたしますし、ニュージーランドとも交流いたしますし、公益文科大学でも高校生を対象としたサマーキャンプで英語をびっちり仕込むというものもやっておりますし、この地域を英語漬けにできる、英語漬けの地域にしていくというのも面白いかなというように、決して子どもたちにとって将来損な話ではないと思っているものですから、何とかできればという思いは持っているところですので、交流体験事業やこれからのニュージーランドやデラウェアとの交流事業について少し皆さんからもご意見をいただきたいと思います。教育委員会の事業、あるいは市長部局での事業でもそういう英語教育に資するような事業展開、こういう事業があったら面白いといったようなご意見でも結構ですので、聞かせていただければありがたいと思っております。

資料についてはご覧いただいて後ほど皆様でこういったことも含めながら少しご意見を頂戴できればと思っているところでございます。デラウェアと姉妹都市というお話が出てきたのは一昨年でしたでしょうか、向こうの校長先生がいらっしゃったのは。せっかく平成8年から「はばたき」という事業でこちらの生徒が行っているものですからこれを何とか市民レベル、あるいはもっともっと向こうに、これはあとで知った話ですけれどウェズリアン大学という大きな大学があって、公益大との交流もかつてあったということですから、そういったつながりを活かして市民ぐるみあるいは子どもたちの交流をもっと拡大させられるようにといった思いで姉妹都市の話を持ちかけたのがきっかけでした。

ニュージーランドについては、今年になってなんとか東京オリンピックをふまえて酒田市でもというお話がきたものですから、しからばとのことでしたので、アメリカもニュージーランドも同じ英語圏の国ですが、あれもこれもと手を出すということが、どっちつかずになってしまうのではと不安もあったのですが、まずはどこにどういう種が埋まってるかわかりませんから、とりあえずやれるものはやろうという思いでいろいろな交流に手を染めているという状況です。どうでしょうか、やはりALTを増やしたいですね。それはそれとしてニュージーランドというのは日本に一番多くALTを出している国であるとニュージーランド大使が言っておりました。これは考えなくてはと思っております。

この間、偶然なのですが、今回「はばたき」でデラウェアに行く生徒たちと庄内空港で一緒になりまして、待合室に入った途端に囲まれまして、一緒に写真とってくださいなど言われまして、あの時だけ芸能人になったような感じで、凄い人気だなと思ったのですが、やはりこれからアメリカに行くという期待感で目が輝いているのですよね。異文化に触れる、あるいは自ら希望して手を上げて行くという選択をした子どもたちですから非常に積極的でしたし、こういう子が酒田市からどんどん生まれるという事はとても良いことだなと思ったものですから、ぜひ英語の交流体験事業というのに力を入れていきたいと思っております。ALTを増やしたいという教育委員会の希望についてはしっかり受け止めて予算編成作業に臨みますので、予算資料だけはしっかりつくっていただきたいと思います。

(齋藤委員)

選択の余地があるのであれば、例えば、デラウェア出身の方から来ていただくとか、そういったことも検討していただければと思います。

(丸山市長)

今齋藤委員から出た件で、私も教育委員会に聞きたいところでしたけれども、仮に増やすにあたり、どういうルートで手立てを講じていくのか、デラウェアから市長がくるのは来年4月頃でしょうか。そこからではちょっと遅いのかとも思うのですが、直接そうやって交渉していくのか、あるいはニュージーランド大使にニュージーランドから来ているALTを1人、2人本市にお願いしますという話をするという段取りで進めたらいいのか、別に山形県教育委員会をとおして配置してもらうのを待ってたらいいのかというのをとところが私にはわからなくて、どのようにアクションを起こせば、来年度実現しやすいのかというところを教えてくださいたいと思います。

(学校教育課長)

今年度の3名のうち2名が地域人材ということで、酒田市在住の方をお願いしております。残りの1名がJETプログラムという事業で派遣をお願いしているのですが、今年度7月からお願いしている方はオーストラリア出身の方です。昨年度の1名はアイルランドです。やはりいろいろな国の方々と酒田の子どもが交流する中でそれぞれの国の文化も知ることができるであろうということで、オーストラリアを希望したところです。おそらく出身国を希望することはできると思います。ただ国は指定できても例えばアメリカのデラウェアとそこまで限定してお願いすることができるかは確認してみたいと思います。少なくとも国はある程度指定しております。

(丸山市長)

そういった手順に則ってお願いしたときに、デラウェアだとかニュージーランドといった指定がなかなか難しいとすると、私としては困ってしまいます。せっかくですからこのニュージーランドとデラウェアにこだわるわけですよね、もしそういったことが可能でないのであれば直接交渉でそういった方をおいてもらって、教育委員会あるいは市長部局において、各小中学校、場合によっては高等学校でもいいのですが、カリキュラムを組んでもらって仕事してもらおうとか、フリーな時間については社会人や大学などの交流にも活用できるのではないかという思いがあります。そういったやり方で直接交渉して雇用するという動きも取れるのではと思っています。やり方については、ご検討いただければと思うのですが、せっかく姉妹都市、ホストタウンという環境を持つことになるわけですから、その人を招きたいと思っています。

(浅井委員)

一つ質問なんですが、ALTというのは英語指導補助ですのでJETですとそれなりの研修を受けて派遣されてくると思うのですが、一般の方が来ました雇ってくださいといった形でも

雇うことは可能なのですか。

(学校教育課長)

JET の方はやはり研修といいますか、そういった試験に合格した方を派遣しているというように、現実的には試験に不合格とある方もいらっしゃるそうです。そういった状況です。

(浅井委員)

そうすると別に誰でもいいわけですね。特に研修等を受けてなくても酒田市で雇うことはできるわけですね。

(学校教育課長)

JET 以外でということであれば可能です。そういったことを考えれば、現在の地域人材の2人については、おそらく最初 JET だったかと思いますが、その後は酒田市独自でお願いしております。

(丸山市長)

地域人材という選択もあるということは、自治体で何名配置するかについては自由だということでしょうか。枠などが県から定められているわけではないのですね。各自治体がお金をかけて多く配置したいと思えば配置できるというそういう理解でいいですね。

(学校教育課長)

はい。

(丸山市長)

外国人だけで英語教育の体制を固める必要はないわけで、英語に通じた先生もいらっしゃいますし、学生の中にも話せる人もいるでしょうから、そういった方を活用するというのももちろんある話だと思います。

(國眼委員)

単発的な試みだったと思いますが、イングリッシュカフェを中町で開催したということを知っています。こうした試みをもう少し定期的に開くことができれば良いのではと思います。あるいは、今年初年度で高校生を対象にしたグローバルセミナーの中学生版みたいなセミナーを3日間、教育委員会と公益大の連携事業の一環として実施しました。初年度だったので応募者が少なかったのですが、もう少しそういったものを市民に活用していただくとか、ALTの方を増やすことによって日常的に語学に触れる、使える語学に触れるということを増やしていただきたいと思います。このALTが平成26年から27年にかけて1人減っておりますが、小学生の学習指導要領が変わるということもわかっておりますので、是非小学校にも少しウエイトをおいていただき、親しむ活動を増やして欲しいと思います。

中学校1年生の1学期ぐらいまでは英語を楽しんでいたのが、その後学習内容についていくことができなくなり英語が嫌いになってしまう学生が結構おりますので、単なる教科としてではなく日常使える、そして使ってコミュニケーションする楽しさというのを市民に広げてほしいと思います。そういう意味では「はばたき」などのように派遣するというのはとても大事ですし、彼らは二皮くらいむけて帰ってきますので、とても大事ですが、その他行かない大勢の小学生、中学生、高校生に対してALTだとか市民全体を対象にしたカフェ的なものを継続してやっていただきたいと思います。

(岩間委員)

今日も午前中に学校視察ということで、酒田四中の授業を見せていただいて、ちょうど英語の授業で、ALTが入ったクラスを拝見させていただきました。

文法の勉強をしているほかに、4～5人のグループワークの中から1人がALTのところに行って、英語で聞いたことをグループに持ち帰って皆で答えを考えて、ALTに英語でこう考えましたと答えるというような授業があって、聞き取れるようなコミュニケーションですね。そういったコミュニケーションをとるための英語の勉強となるとやはり生の英語とキャッチボールしないといけないのかなと思いました。とてもいきいきと授業をしていて凄く楽しそうだなと思いました。他のクラスの英語の授業よりALTとやっている授業がとても楽しそうでした。

酒田市にもたくさん外国の方がいらっしゃいますのでそういった方たちを学校に派遣して英語の授業で協力していただいたりとか、その方々が英語圏だけの人ではないのかもしれないけれど、そういったところも含めて酒田に来ませんかというところで、海外からもそういった方を酒田に呼んで勉強も含めて国際交流も一緒にできて、関わりあう機会ができたらいいのではないかと思います。「はばたき」でいける人数は20名と決まっておりますので、そうじゃない子ども達に幅広く来ていただいて酒田で活動してもらえようところに予算をつけていただければ、ありがたいと思いました。

(丸山市長)

「はばたき」は訪問だけなんですよね。基本的に向こうの方が来る事業ではないので、向こうの子どもたちも来るような事業展開ができればいいんでしょうけれど、はるばる日本までやってくとなるとお金がかかるということで、経済的にそういうことがかなう子どもたちがアメリカの交流している学校の方ではなかなか難しいというお話を校長先生から聞いたので、ちょっとハードルはあるかなと思うのですが、学校を特定せずに呼べれば、姉妹都市になったということと呼んで交流する事業というのを組んでもらいたいと思います。

それからもう一つ、ニュージーランドとの交流ということに具体的に動き出すとなると、やはりニュージーランドに訪問する事業、ニュージーランドから招く事業というのも出てくるんだろうと思うのですが、それは中学生に限定する必要もないのでしょうか、できれば中学生の頃というのは多感な時期ですのでニュージーランドを体験してきてもらうというのもその子の人生に良い影響を及ぼすのではないかと考えております。ニュージーランドとの交流について、重く受け止めているのはものの考え方というところです。言葉を習得する

だけでなくやはりニュージーランドという国はある意味頑固というか、例えば大使から聞いた話なのですけれど、アメリカやイギリスなどと交流はあるわけなのですけれど、原子力潜水艦などは一切国に入れれないのだそうですね。いくら外してあるからと言っても外さない可能性があるからということで一切入港を認めないという頑固な国なのだそうです。そういう哲学というのはどういう風土から生まれてきているのかとか、いろいろな生活信条だとかそういったものに触れる機会があると、その子の生き方にでも何か影響を及ぼすようなことがあるのではないかと考えております。それからニュージーランドという国は、政府に対して、あるいは自治体に対していろいろ住民の皆さんが意見を言う、自分たちの考えをはっきり伝える、日本の言葉で言うと市民の参画意識が強い国だと言われているようなので、そういったことを学んできてもらうという意味でも、言葉プラスそういったものの考え方というか、そういったものを学ぶ意味合いでもできれば向こうに行く意味があると思います。ただ、こちらもお金がなかなかないものですから、毎年である必要があるのか、2年に1回なのかというところは議論の余地がありますけれど、そういったものも、せっかくホストタウンを結ぶのであればやりたいと考えております。

ホストタウンについてはオリンピック・パラリンピック絡みなので、トライアスロンという競技を介して交流しようということで申請をしております。そのため、例えばトライアスロン競技にニュージーランドの人を呼ぶとか、あるいはトライアスロンの選手が来たときに、スポーツという関係の交流で学校の子どもたちにスポーツ指導してもらうとか、あるいは直接オリンピック競技と関係ないのですけれど、ニュージーランドはやはりラグビーがあります。ラグビーでホストタウンを結ぶ国は日本でも2、3箇所あるのですが、交流という面では、ラグビーの指導者を招いても良いので、そうなれば、高校なんでしょうか、女子ラグビーというものもありますから、高校と社会人との交流でお招きをするということもあると思います。それから、ニュージーランドは農業国ですので、農業青年を訪問させたりあるいは招いたりして、交流研修をするということも考えだと思っておりますし、ニュージーランドはあの国土に人口が500万弱しかいないのですよね。そういう面では人口が少なくなるという日本の現状も念頭において、どういう生き方、産業のあり方がいいのか、あるいは行政組織のあり方は、どういうあり方がいいのかということも勉強できるのではないかと考えております。

前のニュージーランド研究所の所長の矢口副市長や今の武田所長などの意見ですと酒田、庄内の景観はニュージーランドにそっくりなのだそうです。ですからそういったところからも交流を進められたらいいかなと思います。次代を担う子ども達にいい影響を及ぼせるような事業をなるべく展開をしていきたいと考えておりますし、そういった意味でもさらに来年度以降は拡充していきたいと考えております。ここに挙がっているのは比較的アメリカが多いのですけれど、アメリカでももちろんいろいろな活動を継続していきたいと考えております。何とか招きたいですね。息の長い話になるのですが。

(齋藤委員)

ホストタウンになった場合、基本的にチームの選手たちが酒田に来て、オリンピック本戦前のキャンプ地としていろいろトレーニングもしていくのでしょうか、どのような活動になるのでしょうか。練習は行うとは思いますが、例えば一月前くらいに来ていろいろス

ケジュールがあると思うのですが、どうなのでしょう。

(丸山市長)

私たちが具体的な内容まではわからないのですが、ホストタウンになれば、ニュージーランドのトライアスロン協会の皆さんが酒田にやってきて、キャンプをする練習施設、きちんとした施設があるかどうかを検証するという作業が来年出てくると思います。さらに本市にはトライアスロンのおしんレースがありますけれども、これもこれまでどちらかというと市民サイドが中心となったイベントだったので、そこに行政も連携して、ニュージーランドから選手を招聘するとか、そういったことなどもしてイベントとして盛り上げていく必要があると思います。まずニュージーランドの協会が視察に来て、あるいはニュージーランド大使が視察に来たときに、本市の施設が練習や選手の強化に十分使えるとなれば次の段階でキャンプという感じで決まってくる、有望な選手がこちらでキャンプを張ることということになると思いますけれども、なんといってもトライアスロンは泳ぐ、走る、自転車ですね。練習コースとして適当なコースがあるかどうか、その検証に我々が合格できるかどうかということがかかってくるので、今のおしんレース自体もオリンピックの規格にあった競技内容になっているので大丈夫だとは思いますが、例えばウェイトトレーニングをしたりする体育館などそういうものもきちんとあるかということも見てくると思います。それから宿泊施設やそういったものも問われてくると思うので、まずは今月中に結論が出るということもありますが、それが出た後に来年度ニュージーランドの方をこちらにお招きして見てもらう。それで OK となればそこから先はキャンプ地という形でこういったものを準備してくださいなどいろいろな要請が来ると思います。

(齋藤委員)

決定になれば、イベントにも選手の方々が来ていただける可能性も十分あるだろうし、大会等の盛り上がりも違ってきますよね。

(丸山市長)

そうですね。このあたりはどのように進めていけばよいのか工夫が必要だと思います。ホストタウンの登録も三次申請となり申請数が増えてきております。特にニュージーランドは、国は小さいのですが人気がありますので、どうなるのか、あまり楽観視はしていません。ただ、トライアスロンという競技に着目しているということと、ニュージーランド研究所が公益大にあるということが、どれだけ作用するかというところに賭けてみたのですが、ただ、これは大使にも言っているのですが、東京オリンピックのためにホストタウン契約を結ぼうという思いは確かにあります。ただ、あることはあるけれどそれが全てではないということです。むしろそこから先、息の長い交流といいますか、子どもたちの教育という面ではずっと交流できたという思いがあるのでしっかりと伝えさせていただきました。それについてはニュージーランド側も非常に感心を持っていただけたと思いますので、仮にホストタウンにならなかったとしてもここまでニュージーランド大使館と公益大を介してお話をさせていただいているので、こういった事業については展開をしていきたいと思っております。



ます。どうでしょうか、中学生の英語を使った交流体験についてということで、例えば中学生の修学旅行先をニュージーランドにするなどというのは乱暴な考え方なんじゃないかな。直通の飛行機もありませんので。

(村上教育長)

デラウェアに昨年行って本当に凄いなと思ったのが、子ども達は向こうの子ども達と一緒に生活するわけですね。学校生活、ホームステイもありますけれど、これに勝るインパクトはないのではとっております。できるだけ実際の場に立ち合わせたいなとっているのですが、今のように向こうから来てどれくらい来れるかですね。何年に一度来るかどうか。あるいはニュージーランドとの交流がどうなるかというときに、個人的に思っているのは、姉妹都市なら、あるいは友好都市ならその学校レベルで姉妹校、友好校というように広がっていくのではないかと考えております。そして、仮にデラウェアに行った子ども達が、ネットでカメラとマイクで向こうの学校とつながったとして、この間はお世話になりましたとか英語で喋っているとむこうも喋ってきて、僕の仲間も後ろにいますけれども喋ってもらっていいですかとなれば、クラスメイト同士、行かなかった子どもも実際喋るようになる。そうするとこれは昨日僕が描いた絵でして、これはこういう絵なんですよと言うと少し文化が伝わったり、何か質問受けたらこれこれしたりとか、そのようにネットなどの通信機器をうまく使い、それから教育課程をあまり邪魔しない程度であるならば、子どもと子どもが喋る機会が広がって行って、時差の問題だとか色々乗り越えるべきことはあるのかもしれませんが、リアルタイムは難しかったりなど、よくわかりませんが、そうやってなんとかして出会わせたいなと思います。そういった環境をつくらうとすると、時差の問題が一番あるかもしれませんが、ビデオレターでもなんでも、そうやって相手の反応でコミュニケーションをとりながらというようなこと、何かもう少し広がりを見せたならば、アメリカがあり、ニュージーランドがあり、また違うねとか、それから観光パンフレットに書いてあるような日本紹介じゃなくて、わたしの酒田の生活というのを伝えたときに、はじめて向こうはあなたってこういう生活してるのね、それが酒田の生活なんだとか、はたはたがきて食べたとかそういうのが良い情報で、拙い英語なのだけれども実際に使えるような環境を整えてあげる。上手ではない英語なのだけれども、ちょっと接するような環境を整えてあげるとか、あるいはちょっとした酒田の紹介が、駅前などにある広告が変わるような看板がありますけれども、あれで拙い英語かもしれないけれども、ようこそというのが出たりとかですね、何か相手を意識したメッセージを中学生が書いたり喋ったりするような、そういったことで広げられないかと思っております。

(丸山市長)

すでに行っているのかもしれませんが、「はばたき」で行った生徒たちが帰ってきてからもそういった形で、向こうとのつながりができるような、アフターケアの授業などが学校、あるいは教育委員会で準備してもらえればと思います。行っただけにとどまらずまた交流が広がるという、そういう側面をもつ事業展開をお願いできればありがたいと思います。

「はばたき」は、今もたしか 20 名が訪問しているのですよね。でも、応募者はもっといる

のですよね。行きたいという子には、そこもちょっと考えなければいけないですね。財政課から怒られるかもしれないですが、行きたいという子には行かせてあげたいのです、正直に言って。意欲のある子ですから、行きたくない子に行けと義務的に割り当てるとするのはやる必要はないと思うのですけれど、行きたいという熱意のある子は行かせてあげられればという思いはあります。そこは少し意見交換させていただきたいと思っております。

社会教育文化課長に聞きますけれど、「英語で遊ぼう」という事業をやっていますが、これもかなり人気があるわけですが、これはどうでしょうか。評価が高いというのは十分わかっているのですけれど、例えばALTを増やす、さらには小学生への学習指導要領が変わるということで、学校をとおして小学生への英語の働きかけを強めるということになりますので、効果がだぶってしまうという声もあります。そこは一定の整理をしていかなければという思いもあるのですが、ALTにシフトしていくということについてはどういう意見ですか。

(社会教育文化課長)

30年度の指導要領の改正に向けて、「英語で遊ぼう」については、見直しを図る必要があるとの認識はあります。継続の方も少しずつですが減っておりますので、そういった方向で検討しております。

(丸山市長)

わかりました。どうでしょうか、ご意見ございますか、中学生の交流体験事業ということですがよろしいでしょうか。いろいろなご意見をいただきましたが、この部分については私の個人的意見もあるものですから、いずれにしても教育委員の皆さんに、私としても村上教育長と同じで手を抜かず事業展開をいたしますので、ご安心いただきたいということをお伝えさせていただいて、この項目についての意見についてはここで閉めたいと思います。2時間近く議論させていただいておりますが、皆さんの意見をしっかり聞くことができましたし、自分にしても少し考え方が整理できたと思っております。これから具体的な事業として来年度何らかの事業を組んでいきたいと思っておりますので、教育委員会の皆さんとは今後もいろいろ議論をさせていただきたいと思っておりますけれど、英語力を高めるための様々な施策については積極的に展開していきたいと思っております。よろしくお願ひしたいと思っております。

本日の協議については、一旦ここで閉めたいと思っておりますが、その他ということで若干まだ時間がございますので皆様から何かございましたら、お聞かせいただければと思います。よろしいでしょうか。それでは桐澤課長にお返しします。

#### 4 閉会

(企画管理課長)

長時間の意見交換ありがとうございました。次回の会議日程については、まだ決まっておりませんので、開催時期、協議事項等が決まりましたらあらためて皆様方にご連絡差し上げたいと思います。これをもちまして、平成28年度第2回酒田市総合教育会議を閉会いたします。皆さまどうもありがとうございました。